古文　平家物語 (4)

敦盛の最期

源氏方の武将・熊谷次郎直実は、捕らえた敵方の武将が、我が子の年齢ほどの若武者だったため、助けようとした。

熊谷、「あつぱれ、大将軍や。①この人一人討ちたてまつたりとも、
ああ、立派な大将軍だ。この人一人をお討ち申したとしても、

負くべきいくさに勝つべきやうもなし。また討ちたてまつらずとも、
負けるはずのいくさに勝てるわけでもない。お討ち申さなくても、

勝つべきいくさに負くることもよもあらじ。
まさかあるまい。

②小次郎が薄手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、
（我が子の）小次郎が軽い傷を負ったのでさえ、（父であるこの）直実はつらく思うのに、

この殿の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆きたまはんずらん。
この殿の父は、（子が）討たれたと聞いて、どれほどかお嘆きになることだろう。

あはれ助けたてまつらばや。」と思ひて、
ああ　お助け申したい。

後ろをきつと見ければ、※土肥、梶原五十騎ばかりで続いたり。
さっと見たところ、（源氏方の武将の）土肥・梶原が五十騎ほどで続いている。

熊谷涙を抑へて申しけるは、
申したことには、

「助けまゐらせんとは存じ候へども、味方の軍兵、
お助け申そうとは存じますけれども、味方の軍勢は、

※雲霞のごとく候ふ。③よも逃れさせたまはじ。
雲霞のように大勢群がっています。

人手にかけまゐらせんより、同じくは直実が手にかけまゐらせて、
他人の手におかけ申すより、同じことならば直実の手におかけして、

後の御孝養をこそつかまつり候はめ。」と申しければ、
死後のご供養をさせていただきましょう。　と申したところ、

「ただとくとく首を取れ。」とぞのたまひける。
ただ早く早く首を取れ。　とおっしゃった。

※土肥、梶原…土肥次郎実平と梶原平三景時。ともに頼朝の信頼の厚い武将だった。景時は義経と対立したことで知られ、のちに鎌倉幕府の重臣となったが、頼朝の死後に失脚した。

雲霞…雲と霞。人が大勢群がるさまを「雲霞のごとく」という。

重要語句

……たてまつる	お……申し上げる
よも……じ	まさか（決して）……ないだろう

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣いに直したものとなるように、解答欄に当てはまる言葉をひらがなで答えなさい。

心苦しうこそ思ふに

心苦［　　　］こそ思［　　　］に

(2) ――線①「この人一人……やうもなし」とあるが、ここで熊谷が考えている内容として適当なものを選びなさい。

ア　この武者を討っても討たなくてもいくさの勝敗には影響がないのだから、お助けしたい。

イ　この武者を討たないことで勝つはずの戦いに負けるかもしれないから、味方に気づかれてはならない。

ウ　この武者を討つことで負けるはずの戦いに勝つことがあるかもしれないから、やはり大将軍だ。

［　　　］

(3) ――線②「小次郎が……思ふ」とあるが、ここで熊谷が考えている内容となるように、（　　）に当てはまる言葉を選びなさい。

我が子が軽傷を負ったのでさえ、父の私はつらく思うのに、（　　）。

ア　この方が討たれることは、避けられないにちがいない

イ　この方が討たれたとなれば、その父の悲しみは計り知れない

ウ　この方が討たれることもあるほど、戦いとは非情なものなのだ

［　　　］

(4) ――線③「よも逃れさせたまはじ」の意味を選びなさい。

ア　なんとか逃れさせたいと思います

イ　私もともにお逃げいたします

ウ　決してお逃げになれないでしょう

［　　　］